

季節風

時代精神 Zeitgeist ＝変化の時代、倫理モデルの登場＝

情報広報部 山本 直也

この8月に北海道保健福祉部より平成15年度医療相談事例集の「医療に関する道民の声」が医療安全支援センターの1年間の活動報告としてなされた。言うまでもなくこのセンター設置は近年の頻発する医事紛争への行政側の医療安全への取り組みとして平成14年4月より全国の都道府県に中央センター、第三次医療圏毎に地方センター、各保健所にサブセンターとして開設され運営されてきたが、この報告書は道内7つの地方センターと道庁設置の中央センターの575件の相談事例の取りまとめである。

相談方法は電話によるが8割を超えており、相談内訳は診療内容、職員の対応、医療過誤、診療拒否、不正請求、保険外負担、病院等の紹介であった。36例の代表的事例が対応内容を含めて仔細に報告されている。帝王切開後の再出血による子宮摘出後のPTSDをうかがわせる症例、患者に対する職員の不適当な言動、身体拘束らへの苦情、要介護1で療養型医療施設から入院を断られ職員の態度に不満、血小板治療を受けている現主治医からC型肝炎を告知され10年前の他施設での緊急手術時の輸血が原因でないかと推測説明され憤懣やるかたないという前医への訴え、院内転倒骨折

事故、大腸癌（専門外）疾患での他医への紹介遅延への苦情、待ち時間への苦情、某脳外科での無資格者による調剤行為、無資格者によるエックス線撮影、病状経過での些細な事で訴訟をちらつかせるクレイマー、退院を強要されたので訴訟へと多種多様である。

以上の報告書から垣間見られる現状はわれわれ医師・医療者が先輩達から当然のごとく無言で教えられ迷う事もなく目前の病人・傷病者へ全力をあげて治療行為をなすことが前提であった全人医療に象徴されるブリックマンらの言う「医療モデル」の時代（患者に責任を求めず、無私の行為を）が、確実に変容しつつあり、しかも飛行機の中で急病人が出て米国では医師は専門外の患者を訴訟を恐れて診察しなくても、法的に責任は問われぬとの話に、最近までわれわれは個人主義・普遍主義の傾向の強い米国社会のもつ貧富の差も止むを得ないと肯定する医療制度やその倫理感に対して強い違和感を持っていたが、今われわれの足元を見つめ直す時、確実に患者・医師の有り様が社会・経済の変化に呼応しつつ変貌し、患者の自己責任が強く問われる「倫理モデル」の登場と共にその裏返しの表現として、訴訟の頻発という現象が表在化していると言える。

戦後、雇用の安定確保を通じて間接的社会保障制度を構築し貧富の差の少ない豊かな先進社会を作り上げ共同体主義のモデルと言われるわが国も、デフレの世紀といわれる新しい軍事・経済状況の中で市場主義の横行、個人主義・普遍主義的傾向が強まり混合診療・株式会社の医業経営参入ら、「貧しきを厭わず、等しからざるを憂う」というわが国社会の慣習・伝統にそぐわない後世に悔いを残すような医療政策が財政主導のもとで現内閣から公然と出てきている。公的保険の縮小・崩壊と貧富の差別を医療に持ち込む愚かな政策は犯罪の多発する忌まわしい社会を出現させることは社会疫学的研究から自明のことである。何としてもその阻止を図りたい。